

笑顔大好き

発行者：常井洋治
〒319-0205 笠間市押辺1745
TEL.0299-45-6818
FAX.0299-45-0818

県立中央病院、ついに 産科再開!!

産科外来 4月1日から開始

- 3月16日(月)から電話予約開始
TEL:0296-77-5489(県立中央病院・外来電話予約センター専用番号)
8:00~18:00(土・日・祝日及び年末年始を除く)
- 当面は、同病院で妊娠と診断された方でリスクの低い方の分べんに対応していく。年内に第1号出産が期待される。
- 産婦人科医8人体制、小児科医増員(1→3人予定)で対応



▲予算特別委員会にて、橋本知事(右端)らに中央病院の産科再開後の更なる充実に求めた。(答弁する橋本知事。常井洋治は左から2人目)(H27年3月18日)

燃える郷土愛。全力投球!!

— 18回の質問で主張。悲願達成に感謝 —

平成27年第1回定例会の知事提案説明の中で、県立中央病院での産科再開が正式に表明されました。

私は、平成17年度に産科休止になって以来、10年間その再開を叫び続けてきました。一般質問や予算特別委員会などでの質問は18回に及び、時間もかかりましたが、悲願を達成でき感無量の思いです。

橋本知事や永井病院長はじめ、多くの関係者の皆様

の地道なご尽力に対し、厚くお礼を申し上げます。

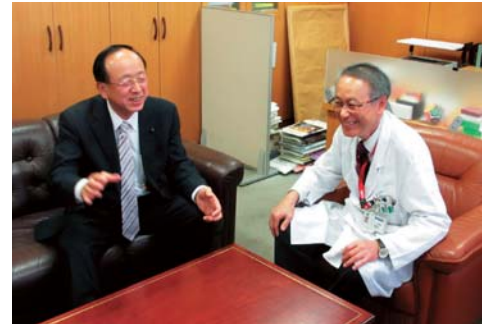
まずは、リスクの少ない分べんからのスタートですが、私はこの先の産科体制の充実を引き続き訴えてまいります。

皆様の温かいご支援、ご協力に心から感謝を申し上げます。

茨城県議会議員 **常井洋治**



県立中央病院の充実に熱い情熱を注ぎ続けた永井秀雄病院長が退任。感謝のインタビュー。



常井洋治 永井先生、8年間お疲れ様でした。

平成27年3月末をもって院長職を退かれるわけですが、平成19年4月の院長就任以来、救急医療体制、化学療法や放射線治療の充実によるがん診療体制の強化をはじめ、長年の悲願であった産科再開の道筋を拓くなど、私が中央病院に期待していた役割を殆んどこなえてくれました。本当に感謝しています。

本当はもう少し院長職にとどまっていたいただきたいというのが、私の願いだったのですが。

永井院長 8年間院長職をやらせていただいたわけですが、本院の医療機能も充実し、なにより最大の懸案であった産科の再開に向けて、多くの方々の協力を頂き実現できることとなりましたので、一度区切りを付けようと思っていました。

ただ、これからも非常勤の医師として県立中央病院の医療には関わりますし、茨城県全体の医療や、教育にも関わっていきなと思っていますので、引き続きよろしくお願ひします。

常井洋治 ありがとうございます。院長を退かれる今の率直なお気持ちを聞かせ下さい。

永井院長 赴任する前多くの方から、自治体病院は、法律や予算の制約が多いので大変だ、苦勞するよ、と言われておりましたが、幸い、知事はじめ県庁の方々や、県議会のご理解とご協力があり、いろいろなことが実現できた、本当に充実した8年間でした。

特に地元の常井議員には、日頃からいろいろな形で応援いただき、大変感謝しています。

【着任時の中央病院の印象】

常井洋治 今回は8年間を振り返る対談ですので、着任の時のお話から始めたいと思いますが、永井先生は特に茨城県や笠間市に縁があったというわけではないですね。

永井院長 特に縁があったわけではありませんが、前任が隣の栃木県にある自治医科大学ですので、それなりに事情は知っているつもりでした。

自治医科大学は地域医療を担う医師を養成する大学ですので、自分も医師としてのキャリアの最後は地域医療を担いたいという希望がありました。

茨城の医療の現状を見ると、非常に少ない医療人材が多くの患者さんを診療するという、これからの日本の医療の状況を先取りしていると思えたので、その中でどういったことができるかやってみたいという思いがありました。当時の茨城県病院事業管理者の古田直樹先生からお声が掛かりましたので、決断しました。

常井洋治 本当にその時に決断していただいて、ありがとうございます。

永井院長が赴任した当時、県議会では、中央病院は廃止も含めた厳しい議論がありましたが、永井院長の中央病院の印象はどのようでしたか。

永井院長 赴任した平成19年当時、県立病院に対する視線は大変厳しいものがありました。しかし、それでは医療や職員が質が低かったかという、そうではないというのが私の印象でした。

私自身は、良い医療をすれば必ず数字的な結果は出てくると思っていましたから、非常にポジティブにとらえておりました。

常井洋治 そういった中で、どのような病院を目指していこうと思っていましたか。

永井院長 ご承知のように県立中央病院は、茨城県で唯一の県立の総合病院です。しかも、医療資源も決して豊富とは言えない地域を支える役割を担っています。

このため、各診療科が専門性を高めるとともに、各診療科と一緒に診療にあたる体制を整えることで県民の皆さんの期待に応えられると思いました。

繰り返しますが、良い医療と良い経営は車の両輪です。

県立病院に対する批判の原因は、私は、公立病院に共通していたことだと思いますが、例えばいい医療を行うためにスタッフを増員しようとしても、職員定数の上限が条例で決まっています。つまり、現場の意向が反映されない仕組みだったことが大きかったと思います。

古田管理者から、地方公営企業法が全部適用され、今までよりいろいろな面で現場の意見も反映させやすく、自由度も高くなるとも言われておりましたが、県議会のご理解もいただき、財政的にも人事的にも、いろいろと議論をさせていただき、かなりのことができたと思っています。

常井洋治 確かに、施設面での充実だけでなく医師や看護師などスタッフ数も、先生が赴任してきた当時と比べると大幅に増えています。人材確保のご苦勞は大きかったと思いますが。

永井院長 日本中どこでも医師不足・看護師不足といっていますので、人材確保は大きな課題でした。医師確保については、幸い、筑波大学と非常に良い関係が構築できつつあります。また、看護師確保についても、看護教育を充実してきたこともあり、大分本院を希望する方も増えてきています。

やはり、きちんとした診療ができる、教育体制がしっかりしているといった、医療従事者に魅力ある病院とすることが大事だと思います。

【職員の意識改革】

常井洋治 組織を変えるには、働く人の意識改革が重要だと言われますが、その点はいかがでしたか。

永井院長 医療者は、困っている人を助けたいという気持ちがあって、この職業を選んだのだと思っています。ですが、日々の仕事の中で、ややもするとその気持ちを忘れてしまいがちです。私は、その志をもう一度思い出そうよ、病院の中心は患者さんだよということを繰り返し言って来ました。

【地元との関わり】

常井洋治 地元笠間市との関わりはどうでしたか。

永井院長 笠間市内の医療機関や医師会、薬剤師会、笠間市との関係では、笠間市立病院の夜間休日救急での連携がまず挙げられます。病診連携が進み、県内初の本格的な地域連携システムの運用もできました。在宅透析は排水の問題で笠間市と相談しながら、スムーズに導入できたと思っています。

また、救急センターオープンの際には、地元の皆さんを対象

に見学会を開催しましたし、ドクターヘリ運航に当たっては、騒音を計測するなど、地元の皆さんのご協力をいただける、地域に根付いた病院となるよう努力してきたつもりです。



▲笠間市との連携でドクターカーを発足

最近、東西茨城歯科医師会さんと連携協定を結び4月から訪問歯科診療が始まりますし、病院だけでなく介護施設からも看護師さんを研修で受け入れるといった連携・交流も進めています。

県立病院の役割として、県の医療のレベルアップということも考えておりますし、国が進める病院から在宅への移行に際しても、こういった地域連携は大事だと思っています。

【8年間の実績】

常井洋治 先程もお話ししましたが、この8年間で本当に病院機能の向上が図られたと思いますが、具体的にお話下さい。私は、永井院長が「救急患者を原則として断らない」という方針を打ち出した時は、本当に感激しました。

永井院長 まず、救急医療体制は整備したいと思いました。

県民の皆さんが一番不安に思うのは、医療機関が閉まっている時間帯、夜間や休日に病気になったりケガしたりしたらどうしようということだと思います。

県立病院として、このような県民の皆さんの不安の解消をするのは当然だと思っておりますし、私は救急医療というのは、医療の原点だと思っておりますので、まず、ここを充実したいと思いました。

この結果、要請に対してどれだけ応えられたかという「応需率」という指標があるのですが、茨城県内ではトップとなる95%を超えていますので、本当に職員にはがんばってもらっているといます。永年の懸案であったドクターヘリの運航も開始しました。

また、救急車で運ばれてくる患者さんの中に、もう少し早く処置できたら助かった患者さんがいたのではないかと、助かる命であればなんとか助けたい、という話が出まして、笠間市消防本部さんと協議してドクターカーの運用を開始しました。

常井洋治 救急センターにあわせて循環器センターを併設しました。

永井院長 心筋梗塞など特に冬場は、循環器系の疾患の患者さんが運ばれてきますので、救急体制を整える上でも非常に重要な診療科です。

筑波大学のご理解をいただき整備できたのですが、短い期間で本院の中でも本当に重要な位置を占める診療部門になりました。

【がん医療】

常井洋治 永井院長の専門のがん診療についてはどうですか。

永井院長 当院はがんセンターを併設していますし、茨城県で唯一の都道府県がん診療連携拠点病院となっていますので、その名前に恥じないように強化してきたつもりです。

従来のがん診療は、手術が中心でしたが、今は、抗がん剤などの化学療法や放射線治療など、一番患者さんに適切な方法で治療を行うようになっていきますので、化学療法センターと放射線治療センターも充実しました。

がんは昔に比べると治るようになってきましたが、残念ながら、お亡くなりになられる患者さんがいるのも事実です。こうした患者さんやご家族の苦痛を和らげる緩和ケア病棟も整備しました。

県央・県北地域では、婦人科腫瘍に対する診療体制が脆弱だったことから、筑波大学のご理解をいただき、婦人科の充実を図ることができました。婦人科を受診する患者さんは増えており、こんなに多くの方がこの病で苦しんでいたということを改めて実感しました。

また、長年の悲願であった産科の再開も道筋をつけることができました。

常井洋治 その他はいかがですか。

永井院長 透析の充実もあります。当院では夜間透析、在宅透析など患者さんに優しい透析を行っており、病院機能評価でも非常に高い評価を頂きました。

さらに、重症患者を受け入れるICU、HCU病棟や手術支援ロボット「ダヴィンチ」の整備、7対1看護基準の導入などがあります。

常井洋治 逆に出来なかったことなどや、これまでのことを評価するとどうでしょうか。

永井院長 看護師さんが不足しているため1病棟を数年にわたって閉鎖せざるを得ませんでしたし、診療科によっては一人の医師しかいない、また、精神科の常勤医がないなど、医師・看護師の確保はまだ必要だと思います。

また教育・研修・研究体制も大分整ってきまし



▲若手医師の研修の様子

たが、これももっと充実する必要があると思っています。

8年間の評価ということですが、評価は他の方にお問い合わせとして、私は自分なりに精一杯やって参りました。

【県民の医療の要としての中央病院】

常井洋治 永井先生がお考えになる理想的な中央病院像は、どのようなものですか。

永井院長 今までは、第一のステップとして診療面・経営面ともに、病院として自立できることを目指してきました。

しかし、私は、中央病院だけが良くなればよいというのでは、県立病院の役割を果たしていないことになると思います。

広い可住地面積を持つ本県にあって、県民の全ての医療を中央病院が担うことは不可能ですので、地域の医療機関等と連携・協力しながら、県全体の医療の質を向上させていく一翼を担うべきだと思っています。

これは、昨年度策定した「茨城県病院事業中期計画」でも明確に記載しています。

具体的には、研修・研究機能を充実させ、医療資源がより不足している地域への人材の派遣や、研修の受け入れなどをもっと積極的にやっていくべきだと思います。

徐々にですが、医師の他、看護師、薬剤師についても派遣をはじめています。

常井洋治 医科大学の誘致がなかなか進まない中で、医師などの人材養成面で大学に準じる機能を持った病院というのが私の願いです。

永井院長 診療だけでなく、人材育成、研究なども担って、

常井議員がおっしゃるようになればいいなと思っています。

【一番の思い出は、東日本大震災】

常井洋治 ところで、この8年の間で一番思い出に残っている出来事はなんでしょう。

永井院長 やはり、東日本大震災です。

話し出すときがないのですが、二つほどお話をさせていただきます。

本院の被害も大きく、特に病棟から患者さんを避難搬送しましたが、大震災の1ヵ月前の2月に救急・循環器センターがオープンしてましたので、そこに多くの患者さんを収容することができました。救急センターについては、柱を使わない工法を使っていますので、スペースが広く確保できました。まだ寒い時期でしたので、本当に間一髪で間に合い、本当に助かりました。

透析センターでは、特に被害の大きかった県北海岸部の病院から、多くの患者さんを受け入れました。透析には大量の水が必要ですが、地下水が利用できたことが幸いでした。

常井洋治 あの時永井院長はじめ医療スタッフが患者のために、殆んど飲まず食わずで踏んばる姿を現場で目の当たりにして、すごい人たちだと身震いしたことを覚えています。この経験を踏まえて、災害拠点病院として今後どうすれば良いとお考えですか。

永井院長 本当は、建物自体を免震構造にすることが良いと思っていますが、エネルギーや水、通信といったインフラを強化することがまず必要だと思います。

水については、既に地下水を利用したシステムを導入しており、現在、電気についても検討中です。また、衛星携帯電話も導入していますが、電波状態の問題もあります。

備蓄食についても患者さん用はありましたが、職員用がなくて大変困りました。震災時は常井議

員から差し入れをいただき本当に助かりました。反省点として改善すべきことでしたので、現在は、一定数量を備蓄しています。

職員も異動しますので、いろいろな状況を想定して、繰り返し訓練することが重要だと思います。

【医療教育への取り組み】

常井洋治 永井院長は、地元の友部小学校、友部中学校と連携した「いのちの教育」や、小学校高学年を対象に模擬手術やAEDの使い方を学ぶ「キッズくらぶインホスピタル」などにも取り組みはじめました。

私は非常にすばらしい取り組みだと思い、議会で質問もさせていただきました。

永井院長 多くの患者さんと接する中で、ご病気になられてはじめて自分の体のことを考えるのを見る中で、病気や体に関する知識がないということに気づかされました。

このため、学校教育の中に、このような授業があるべきと考え、笠間市教育委員会と相談させていただき、総合学習の時間を使って「いのちの教育」をモデル授業として行っています。

また、病院というところは病気にならないと来ないところですから、もっと病院を知ってもらいたいということで、「キ

ッズくらぶインホスピタル」をはじめました。

最近では、がん教育ということで、昨年は私も高校で講演をしました。

このような取り組みが、笠間発ということで広まっていくことを願っており、これから少し時間ができますので、こういったことに力を入れていきたいと思っています。



▲「キッズくらぶインホスピタル」での模擬手術

【今後の中央病院の整備方向】

常井洋治 今の中央病院は、永井院長はじめ職員のみなさんの努力の結果、患者さんや職員も増え、診療スペースだけでなく、執務スペース、駐車場も足りないと思っています。

本体は築28年を経過して老朽化しており、災害拠点病院としての機能を発揮するためにも、免震構造による建て替えが必要だと思うのですが。

永井院長 まだまだ耐用年数もありますので、あと15年程度は使っていこうと思っています。

そうはいつても、常井議員にご心配いただいたように、非常に手狭になっていますので、今、旧看護師寮の跡地に新たな施設の計画を進めています。

常井洋治 建て替えに当たっては、医療連携を考えると、畜産試験場跡地の県立こころの医療センター周辺に移転することがいいと思うのですが。私は、県立中央病院、できれば県立こども病院もそこに移転し、これら県立3病院を1カ所に一体的に整備して、「日本一の医師養成センター」を目指すことを政策に掲げています。先々、そこに医科大学を誘致できれば、より機能を発揮できると思っていますが。

永井院長 古田管理者当時、県立病院を1カ所に集めて、相乗効果で医療機能の向上を図る「総合医療センター構想」というものを考えたことがあります。患者さんだけでなく、医療者の育成にとっても非常にいい考え方だと思っています。

常井洋治 今、日本の医療は大きな過渡期にあると思います。その辺を踏まえて、今後の永井院長の中央病院や茨城県に対する思いを伺えればと思います。

永井院長 来年度1年間かけて、病院ごとの医療機能の分担を踏まえた「地域医療構想（ビジョン）」を各県が作ることにします。

本院は、基本的に急性期医療を担っていますが、地域的なことを考えると、果たしてそれだけで良いのか、議論をする必要があると思います。

特に本院は県立病院であり、県の医療政策とも密接に関連しますので、そういった面からも、県民の代表である県議会との議論は重要だと思っています。

私自身は、最初にもお話ししましたように、茨城県の今の医療の状況は、日本の将来の状況だと考えています。幸い退任後は、保健福祉部からも声をかけていただいていますので、県全体を俯瞰する立場でいろいろと考えていきたいと思っています。

また、患者さんもいらっしゃいますので、週のうち何日かは中央病院で診療に当たりたいと思っています。

常井洋治 本当に8年間ご苦労様でした。引き続き茨城県のために、ご活躍いただくことを祈念しております。

永井院長 今日はありがとうございました。